

ところにより、紙吹雪.....

高井 啓介

イエール大学大学院博士課程

1996年の初夏にアメリカで学び始めてから随分の時間が流れた。この留学生活はニューヨーク・ヤンキースの歩みとともにあった。一年一年と年を重ねる毎にヤンキースは強くなっていった。逆境の時にはその勝利に励まされ、順境の時には何事も甘く見ぬように、自信過剰にならぬように反省し、ちょうど三年半が過ぎようとしている。

自らの英語力に失望し、クラスで与えられる課題を消化することだけに毎日が追われ、その日その日を生きることで精一杯であった1年目の秋に、ふと友人に誘われて彼の家で見たその優勝の瞬間に魅せられた。下馬評では到底不利だとされた状況を見事に覆えしての勝利を我が身に重ね合せての観戦であった。日々の緊張から離れ、ふと息抜きをした、そういうところで出会ったヤンキース奇跡の優勝に少だけ肩を押され励まされた気持ちがあった。

1997年のヤンキースはあと一步というところでアメリカン・リーグを制することができなかった。チーム再生以来二年目のジンクスである。二年目の私もいくつかの不安材料に見舞われた。一年目をなんとか乗り切って留学生活が軌道に乗ってきたその矢先、指導教官が一年間研究のためにサバティカルでイエールを離れることになったのだ。三年目の終わりには資格試験(コンプと通常呼ばれる: Comprehensive exam の略)が控えている。私の所属する学科では通常このコンプに向けてそれぞれの学生の必要に応じて指導教官と相談しながらカリキュラムを組む、指導教官も学生の関心を満たす形でクラスの内容を決めることが普通なので、自分の現状を一番良く知っている人物が長期間いなくなることはかなりの不安を

生むことになる。実際、その一年間彼との連絡が疎遠になったことで、続く年にコンプ対策のクラスが集中し、必要以上の負担を強いられることになった。

1998年の9月に始まった三年目の秋・冬学期は指導教官とマンツーマンで議論を重ねていくという機会が多く、緊張を強いられる日々が続いた。留学生としてはどうしてもぶちあたらずを得ない問題だが、議論の基本となる英語で自らの思うことをインテリジェントに表現しきれないということは相当ストレスのたまることである。その状況をなんとか乗り切れたのは思うに、後に結婚することになった妻に毎日電話で励まされたこと、そして毎朝図書館で読む新聞のスポーツ欄のヤンキースの快進撃のニュースに胸躍らせたことであった。博士課程の学生の中に結婚している学生が多いこと、そしてスポーツバーで酒を飲む学生が多いことは、必然なのかもしれない。このシーズン、チームを立て直したヤンキースは本当に強かった。リーグの年間勝利記録をあっという間に塗り変えた。初めて球場へ足を運んだのもこの年である。残念ながらヤンキースは負けたのだが、試合の雰囲気には酔いしれた。黒人やヒスパニックの観客に比べてもジューイッシュの割合が多いのがこの球場の特徴である。ブルックリンのウィリアムズバーグあたりから地下鉄に乗ってやってきたに違いないウルトラ・オーソドックスのジューイッシュの少年達の黒いキッパーはここではヤンキースの帽子の下に隠れていて見えない。ちなみにこのヤンキー・スタジアムはブロンクスにある。

このブロンクスからハイウェイを車で北東へ1

時間半ほど走った距離に、イエール大学はある。かつては銃製造業や海運などで栄えたコネチカット州のニューヘブンは、現在はその繁栄も今はいずこで、大学がこの町を支える唯一の産業といって過言ではない。犯罪率も決して低いとは言えない。大学は全米で三番目に古く、アイビーリーグの一角をなす。学生は同じくニューイングランドにあるハーバード大学に対してかなりの対抗意識を持っており、特に、11月の中旬、一年毎にお互いの本拠で行われるフットボールの試合は The Game とも呼ばれ、さながら早慶戦の雰囲気呈する。ゲーム自体はさほど技術的にすごいとかいうものでもないが、それでも皆興奮する。昨年はシーズンゲームの末、我がイエールが勝利をおさめ、その夜のニューヘブンの繁華街は夜更け過ぎまで学生や OB の熱気で盛り上がった。

私が籍をおく大学院中近東学科はアッシリア学、エジプト学、イスラム学、考古学、北西セム学(古代シリアパレスチナの言語、社会、文化を総合的に学び、旧約聖書学と密接な関係がある。ここに私は所属する)の5つの専攻からなり、博士課程の学生数は一学年に約2人程度、全体でも15人程度にしかない。北西セム学はアッシリア学及び考古学セクションと密接な関係にある。そういう関係で私が机を与えられた部屋は、通称バビロニアン・コレクションと言って、そこにはこれまでにイエールが携わった発掘の結果として4万枚近い楔形文字粘土板が、その大部分は未だ公刊されぬまま所蔵されており、全米でも有数のコレクションを誇る。考古学セクションは他にもユダヤ教のシナゴグ美術で名高いシリアのドウラ・ユーロポス遺跡の発掘を長い間手がけていたし、現在でも同じくシリアのテル・レイラーンという中期青銅器時代の遺跡を発掘中である。そういったことから、クラスの中で実際に粘土板や発掘出土品を手にとっている光景を目にすることも珍しくない。

中近東学研究室のそういった歴史に新たな一頁を加える出来事が昨年あった。事の発端は、1999年11月14日付けのニューヨーク・タイムスである。次のような見出し記事が一面を飾った。“Finds in Egypt Date Alphabet In Earlier

Era”これをきっかけとして、以後しばらく研究室専属秘書のオフィスは各種マスコミからの取材の嵐に見舞われた。

この発見とは要するにこういうことである。エジプト学助教授の John Darnell と北西セム学助教授で私のイエールでの指導教官でもあった Frederick Dobbs-Allsopp (チップという愛称で我々は彼を呼んだ) とが中心となった考古学チームによって、下エジプトデルタ西部のワディ・エル・ホル付近でその年の夏に行われた集中的調査の結果、石灰岩に刻まれた碑文の文字がこれまでよりも200年程も早い時代に位置付けられる、現存する最古のアルファベットである可能性が強まったのである。この碑文がエジプトのヒエログリフとこれまでに発見されていたアルファベットとの間を埋める “missing link” であることがかなり強まったことで、アルファベットが生み出された場所がシリア・パレスチナよりはむしろエジプトであることもかなり確実になってきた。このようにこの発見はアルファベットの起源に新しい光を当てる重要性を持つということでニューヨーク・タイムスも一面で報道した。この結果はその後、昨年11月末にアメリカ宗教学会及び聖書学会共催でボストンで行われた一万人規模の学会において発表され、注目を集めた。アメリカの大学の片隅に籍をおいていると、時にこのような重要な発見の時にいくわして胸をときめかすことがある。

しかしそういう興奮はごく稀で、実際の学生生活は至極平凡な毎日の連続である。フルタイムで PH.D. を目標とする学生は、ゼミ形式のクラスを四コマづつ履修し、学期末に試験を受けるか研究レポートを提出する。それぞれのクラスではかなり大量の準備を要求される。これが三年間淡々と続いていくのである。そういったコースワークにおいては、自分が論文で書きたいテーマに関して調査を始めるための時間の余裕すら与えられない。これに加えて二年目以降は TA (ティーチング・アシスタント) の為に割かれる時間が多くなる。この制度は博士課程に在籍する学生には通常義務として課され、学生にとって自らの研究以上にその準備に時間を割かれるかなり厄介なものであるが、同時に将来教職を目指すものにとって

はアカデミック・トレーニングとして非常に重要な機会でもある。数年前にこの留学便りで松岡氏がその詳細に関してパークレーの場合を紹介しておられたと思うが、イエールの場合も基本的には同じ様子である。ただし私の学科の場合は博士課程の学生が TA を担当できるようなクラスの数が限られていたので、私は結局日本語学科の TA をすることになった。

さて、話しは巡って昨年のヤンキースである。この年の10月27日、四年間で三度目のワールドシリーズ・チャンピオンに輝いた。それも90年代を通して最高のチームと言われたアトランタ・ブレーブスを四戦全勝で見事に一蹴しての勝利である。名実共に20世紀を締めくくるにふさわしいチームと評価された。それから数日後、恒例の優勝パレードがブロードウェイで行われ、300万人の人々の熱気が沿道に沸き返った。

実はこの期間の私は、上述のコンプに向けての追い込みの最中だったのだ。私の学科の場合、筆記試験（これは主として語学、具体的には北西SEM語テキスト全般の英訳）が週の始めの三日間、一

日おいて金曜日の午後に約二時間の口述試験（学生各々に応じて受ける科目は異なるが、私の場合はシリア・パレスチナの歴史と文学を古代中近東の文脈の中で論じるというものであった）が課せられる。この試験をパスして始めて、博士論文執筆の資格が与えられることになっている。そのように切羽詰まっている中でも優勝の瞬間だけはテレビでしっかり見届けることができた。ちょっとした息抜きなのだと言いつつ聞かせながら。

ところで、パレード当日のマンハッタン地方の天気予報は、洒落っ気たっぷりにこう伝えた。

「曇りのち晴れ、ところにより、紙吹雪……」

私の口述試験が無事に終了したのはそれから一週間あまり後のことである。紙吹雪も舞わず、ビールかけもなかったのだけれども、沢山の友人達の祝福の輪が学科のオフィスで私を待っていてくれた。それから数ヶ月たった今、未曾有の寒波に見舞われる東海岸で、今日も論文計画書提出に向け資料収集に追われる毎日である。この冬が春に変わる頃、そして計画書の提出が終わる頃、また新たなあのシーズンが幕を開けるのである。